

## 寛政異學の禁に就て（承前）

教授 本田 弘

## 本論第一 學派畧説

學に門戸を立て、互に排擠する弊は、古今東西往々ある事なるが、徳川時代を通じては、殊に其の潮流が激しかつた様である。彼の三百諸侯が政治的に睥睨してゐた通、思想界に於ても數多の儒者が各其疆域を守つて、苟くも相下らなかつたのは、寧ろ當時の見ものであつたらう。最初藤原醒窩（元和五）が釋氏の門を脱して、専ら程朱窮理の説を唱へてから、鎌倉このかた天下に覇たりし禪僧の學は遂に廢れて朱子學勃然として興つた。鳩巢小説などによるに、正保の頃、後光明天皇侍講に仰せらる、やう、佛學は面白き物ながら体ありて用なき物なり、儒學とても漢唐古註の説は粗淺にして着實ならず、自今以後君臣共に程朱新註の説を用ふべしと。亦以て宋學の興る氣運を窺ふに足らう。さて醒窩の門下には林羅山（信勝、明曆）堀杏庵（寛永一）松永尺五（昌三、明曆）那波活所（慶安）（以上藤門の四傑）、吉田素庵、石川丈山、菅玄同の徒相踵で出で、慶長九年には家康、羅山（春）を幕府の儒臣となし、政刑典儀就て議せざるはなしと云ふ有様であつた。五代將軍綱吉殆んそ學に狂し、元祿三年嚮きに（寛文）道春に賜ひし上野忍が岡の弘文院を湯島臺に移して聖堂と號し、翌四年五月道春の孫信篤（鳳岡、享保一七）をして大學頭に任じ、校務を司らしめ、且つ束髪せしめられた。これ非常の盛舉であつて、足利以后文學が僧侶の手に歸せしより、儒家と雖も猶ほ剃髪して僧形であつたのが、この時からして形を改め、士籍に列するとなつたのである。蓋し林家の學界に於ける勢力は、此頃が絶頂であつたであらう。さてこの綱吉將軍の頃は、世は全く太平の世であつて、しかも官は世襲な

る所から、下流の輩は、立身の道なく、擧つて將軍の最も好み最も自由を許せし文學社會に向つて走つた。そこで恰もかり王朝時代に於て、高僧大聖の續々として出でたる如く、續吉時代に於て、學者の輩出したことは、前後無比であつた。而して諸藩もまた此風雲につれて、争つて學者を招聘し、傍ら政治の顧問たらしめた。備前岡山の池田光政對熊澤蕃山、會津の保科正之對山崎闇齋、水戸の光國對朱舜水の如きは其最も顯著なる者である。

斯くて崇文の風民間に起り、漢學益旺盛なるにつきては、研修の間に多少主義を異にし、異見を挾む者あるに至るは、これ勢の自然である。寛永の頃近江の人中江元藤樹慶安原元没四一始めて王陽明全書を得て、篤く其説を信じ、躬行を先にし、文詞を後にしたので、人賢愚となく歸する者多かつたと云ことである。この陽明學派の繼續者は即ち熊澤了介藩日、元祿四没、七二で、他に三輪希賢、大鹽平八郎の如きあれど、余り廣く行はれなかつた。それも此學派が未だ全く程朱の範圍を超脱して居らなかつたからではあるまいか。

蕃山は宋儒性理の説を以て満足せず、直ちに儒道を政治上に試みんとした人である。同門の士西川と云ふもの、著顯非の中に、蕃山を罵り、「中江の學派に背き、王陽明まで挫けるは高慢なり、已れが分量知らざる痴者」と云へるを見れば、藤樹の主義とも多少異つてゐたらしい。古賀精里は評して、「熊澤氏其學非王、非禪、自成一家、其談及道學者、多憑臆杜撰、牽強支離、要之、不免爲功利空寂之歸、然其氣焰、足以懾人、器幹足以亡事、豈世之庸腐乖僻汨沒章句者之所冀其方一哉」と云つて居る。かれが岡山の藩主光政に仕へて、王霸の別やら耶蘇教排撃の無益を説き、佛教の專横必ず天下を亂さん事を云ひ、自由の光を認めざる當時の社會に對し、根本的改革の氣風を鼓

吹したる其識見は誠に廣大卓絶、いかにも一代の英物に相違はない。

林門の山鹿素行素行、甚々左衛門、享二、汲六四、眞甲州流の軍術を學び、竊に朱子學の心術に偏して實用に迂なるを疑ひ、聖教要畧を著して文武の大道を述べたが、これが抑我邦の儒流の程朱を疑ふた始であらう。先哲叢談にも「伊藤堀河物赤城輩、以一家學風靡海内、素雖氣運之使然、其嚆矢之任、不得、不讓諸於素行矣」と書いてある。

さて其始めて大に盛なるものは、例の山崎派の學であつて、先是四代將軍家綱の時、神官吉田兼敬、其女を以て家綱の妾とし、遂に幕府に親近するを得て、盛んに神道を説き、天下の神社は多く吉田家の管轄に歸した。吉田家の弟子に吉川惟足と云ふものがある。山崎嘉右衛門閻齋、天和二、汲六五は實に此系統を受けて居る。嘉右衛門性桀驁、幼にして妙心寺に僧たりしが、年二十五の時還俗して宋學に入り、晩年又神道を修めて、名を垂加と改めたので、垂加流の神通といふとも弘まつた。要するに山崎派は神儒佛の相の子然たる一種異様の朱子學である。那波魯堂の學問源流に云く萬治寛文の比に及び、山崎嘉右衛門出て新説を立て云々、凡讀む所の書數種に止まり、歴史四書の類は一切讀むに益なしとて禁之云々、敬義の説に従ふ人は、十人は十人、百人は百人、幾誰に聞ても印し出せる書畫の如く一樣なり、平生學談を以て他門の人に交はらず、唯其同朋と交はるのみなり云々、閻齋派の學問朱子の書に於て取捨する所はあれど、朱子の説を非とするとはなし云々と、これで其一斑が分るであらう。淺見綱齋三宅尙齋等之を繼いで此學一層盛んに行はれ、世を以て計らば殆んど十分の三に居れりと云つてある。

寛永の頃からして既に南學派京學派關西學派などの名稱は稱へられて居つたが、山崎氏は南學派

で即ち土佐の南村梅軒、谷時中、野中兼山、小倉三省の流である。京學派とは醒窩の門人の京より散れて諸侯に仕へ各自子弟を教育するもので、關西派一名江西學派は中江熊澤の徒であるが、後ち京派は水戸派に合し、關西派は南學派と合した跡がある。この水戸派及南學派は實に王政復古の先驅とも云ふべく、水戸派は暫き措き、南學派では三宅尙齋の弟子山縣大貳は柳子新論を著はし、淺見綱齋自らは彼の有名なる靖獻遺言を著はし、其弟子三宅觀瀾は中興鑑言を著はし、觀瀾門下の竹内式部は山縣大貳と共に急激なる排滿主義であつたことは、誰も能く知つてゐる。

(水戸派—近江戸—溫和—尊王論—安政以后に敗跡を現はした  
南學派—近京都—急激—討幕論—天明前后に蹶跌した)

闇齋の後三四十年、貞享元祿の頃、熊澤伯繼と時を同ふして京都の人伊藤仁齋<sup>二</sup>維模<sup>一</sup>、寶永<sup>二</sup>七九<sup>一</sup>が出て始めて宋學を排斥し、別に一家をなした。其主旨は、性理の學は孔子の本意でない。孔子の説く所は、性と教とを兼ねるものであるとて、論孟を以て宇宙第一の書となし、大學は孔子の遺書に非ずとまで論斷した。その所説林門一派の固陋偏狹なるに似なかつたので、四方風を聞いて従ひ學ぶものが頗る多く、子の東涯<sup>長兄、元文は云ふも更なり、並河天民、北村可昌、荒川景元、中江眠山の徒盛んに師説を主張し、或は著述に或は文章に其光采を煥發したるによつて、さしにも強き朱子派の城壘も茲に一大打撃を蒙つた。世間此學を古義學又略して古學と云ひ、又た其人にあてゝ仁齋學と云ひ、其所にあてゝ堀河學とも云つてゐた。先哲叢談に云ふ仁齋實爲一代儒宗天下學者四面來歸之、東涯が盡響錄曰、先人敎授生徒四十四年、諸州之人無國不至、唯飛彈佐渡壹岐三州人不及門、執謁之士以千數と。學問源流に云、「元祿の中頃より寶永を経て、正徳の末に至るまで其學盛んに行はれ、世</sup>

界を以て是を計らば十分の七と云ふ程に行はれ、元和寛永の風なるは甚稀なり」と。此勢を以て進みたる仁齋の復古學も、寶曆の未つ方井上金峨の出づるに及び、余程衰微に赴いた。

當時又文壇仁齋を目して一派の首領となし、詰難攻撃した者は多々であつたが、其書に顯はれた者では山崎泉の大學辨斷之に對し淺見綱齋の題批大學辨斷がある、大高芝山の適從錄、物徂徠の護園隨筆、稻葉正義の初學秦蕪辨等であるそうだ。又仁齋と情交密であつた米川一貞と云ふ人は、書を仁齋に移して朱學を排することを戒めなければ、仁齋が聽かなかつたので乃ち絶交書を送つたろうだ。

東涯は終身仕途に就かざり、所謂溫良恭儉讓の美質を以て家學を紹述した人で關西また異學を講ずるものが無かつた位である。しかも東涯門下より出でて異説を唱ふるもの、青木昆陽の如き、松岡玄達の如き、高養浩の如きものがないではない、

闇齋學仁齋學と相並んで別に一旗幟を建て、恰も三家鼎立の姿を爲し、者は木下順庵其人である。順庵貞幹、錦里、元祿二没、七八、初め京師に帷を垂れ、名海内に振ふ、後加賀侯に召され、更に綱吉に仕へて儒官となるや、林氏以外に學者仕進の途を開いたので、隠然大勢力を作り、續いて其門人新井君美、白石宣直、清嶋雨森、東洲芳洲などの秀才が幕府や諸侯に仕へて頗る信用せられたが爲め、宋學の宗家林氏の權は愈益減殺した。蓋し其學唐宋を差別せず、詩文を兼修し、通曉融徹を主とするによつて一方より之を觀れば古學も亦順庵の開く所と謂つても可い。

木門に人才の多かつたことは、古來有名で、其中でもまづ指を君美、直清に屈する。君美享保一〇は沒、六九は六代家宣に寵を受け、直清享保一〇は沒、七七は八代吉宗の侍講となつた。雨森東、松浦儀之に次ぎ、屢々外國の使節に應對した。文章には祇園瑜、西山順泰、南部景衡、史學には三宅緝明、柳原玄輔、德行には岡島達、岡田玄、堀山輔、向井三省、石原學魯などゐるが實に綺羅星を飾つてゐた。柴栗

山の如きも順庵をば大に敬慕してゐたやうである。

既にして元祿の比、江戸の人物、徂徠が現はれた。徂徠荻生惣右衛門字茂卿、始め朱子學を信じ、仁齋の復古學を駁して居たが、曰く「護國隨筆は不佞未熟の時書に候、御用なされ間敷候」、後ち發明する所あり、盡く舊學を廢て、亭然として卓立した。仁齋一生の學を窺はんには、臺子問、語孟字義を見るべく、徂徠一生の學を見んには、答問書、辨道、辨名、論語微を讀むべしと、文會雜記に松崎君修の説も出てゐる、門弟太宰彌右衛門春臺、安藤仁右衛門、服部小右衛門南、さては山縣周南、龜井道載、大内承裕、平野玄中等相率ゐて師説を奉じ、古學を鼓舞したので天下の學者一時靡然として古文辭學に向ひ、宋學爲に生色なしであつた。例の學問源流に云「徂徠學享保の初年には江戸に専ら行はれ、其餘は江戸にて其學を習ひ、其國に歸りて其説を唱ふる人稀なり、京都には東涯の學盛んにして、徂徠の學は新奇の説なりと云ふ人はあれども學ぶ人は甚だ少なし、其の後漸々徂徠の説に従がふ人多くなり、遂に關西九州四國の邊まで盛んにして、東涯の學をする人は次第に衰ふ、況んや闇齋の流をする人は絶えて稀なり云々、元和寛永の比の風は言出す人もなく、唯春夏の比遠國より京に來る遊人など彼の醒窩羅山の古跡を探討し、或は一乗寺村の詩仙堂を問尋ねて見るばかりなり、徂徠の説享保の中年以後は信に一世に風靡すと云ふべし」と。蓋し徂徠の胸襟は極めて廓大で極めて虚驕で、れのが門人にも力めて牆壁を徹し、派心を去り、何人にも交際し、何の書をも讀むやうに勸めてゐた。彼れは朱學を斥けた。しかし醒窩を尊んで王仁眞備道眞と共に學宮に祀るがよいと謂つてゐた。彼は仁齋の學を謗つた。しかも其人物を賞揚した。かれ嘗て曰く、學問の道は飛目長耳と。徂徠はかくも儒家當時の氣習と反對に凡て開放主義なりしに係はらず、尙ほ時勢にはだされし跡は掩ふはをぬ。元祿年間なれば柳澤吉保に仕へて幕政に與つたことがある。其後正徳年間新井白石の大に用ひ

らるゝや、事に元祿の制を破つて仕舞つた。徂徠竊に之を憤つてゐたが、享保に至り將軍吉宗白石を黜け再び徂徠を任用するに及び、徂徠又た悉く白石の正徳の舊に反せんとした。元祿十五年大石良雄の仇討あるや、室鳩巢は之が爲に義人録を著はし、栗山愿も亦稱して烈士となした。さて翌十六年間罪の議が起り、林春常詩を作りて宥死を諷せしも、執政吉保徂徠の言を容れ遂に切腹を申付けた。此等も矢張學派の勢力消長に關するかと思はれる。佐藤直方大宰郷も非義士論者であつた。かの享保七年のトケ米の令も元來熊澤以下の議論ではあるが徂徠が此説を主張したが爲め、將軍も誠に發せられたのであつて、しかも鳩巢獻事録を著はして深く其非を論じ、十五年に至つて遂に復舊したのである。

徂徠と仁齊は當世文壇の二明星にあつたにつれ、後世此二人を比較品騁するものが段々ある。例へば文會雜誌に「仁齊は深く朱氏家の書を反覆見て悟を開きたるものと覺ゆ、徂徠は不然、四書朱註などにて一通の朱學をせられて、さて古書を博く見て、文章を自由に書き、學問丈夫になりて後、六經を一時にクワラリと埒明たると見ゆるなり」とあるが如き、又は朱子崇拜者なる高養浩の時學鍼柄下卷に仁齊を評して「學雖奇僻、志趣不凡、生長京師、困阨閭里、是以於將愼完、操行無瑕、猶能講義理、不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>鄉先生<sub>一</sub>也、所惜小器易盈、識見未瑩、中畧從商、量六經邊事、如貧子之說<sub>二</sub>金<sub>一</sub>と云ひ徂徠が評して「學力有餘、志氣豪華、彼居<sub>二</sub>東都<sub>一</sub>、拜<sub>二</sub>趨候家<sub>一</sub>、是以傲<sub>二</sub>英雄張發<sub>一</sub>一時之異見、憑<sub>二</sub>凌先輩<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>生徒<sub>一</sub>蔓衍支離、其說<sub>二</sub>多虛誕<sub>一</sub>」と云へるが如き、簡單なる所では清水濱臣の泊泊筆話に「高津阿闍梨は仁齊先生になぞらうべし縣居翁は徂徠先生によく似かよいたる所あり」と記せるが如き、其他幾らもある。蓋し物門は嘉隆李王の教に敬ひし丈け、

先啓は叢談續編柳川  
義興の傳にあれば徂

徠の古文辭學は其實、仁齊派の經義の實に據りしものに比ぶれば、到底浮華の弊を免れぬ。この往々文端を露澤に開くさある辭を彫琢して強て高風に走る弊風は聽て寛永の頃までは盛んであつた。徠を諷刺し書には宇土新の語考、五井蘭州の非物、中井竹山の

非微、服部蕨門の燃犀錄などがある

以上略陳する通、寛永寛文の交へから正徳享保に至る凡一百年間の思想界は宛も戰國割據の姿であつて、試撃論難毫も假借する所なく、學者皆霸氣を帶び、同黨伐異を事としたので、氣通の向ふところ、明和安永の頃に至りたのうと仲裁の勞を取り、調停の説を唱ふるものがでてきた。これが所謂折衷學派である。折衷とは漢學の註疏を取捨し、宋明の諸説を折衷する謂であつて、つまり朱子派守株の弊と古學派過激の失とを補正しようと云ふのである。現今和歌壇や俳諧壇で新舊兩派が衝突しているが其さま朱子派古學派の衝突とよく似ている。して見れば今の和歌壇や俳諧壇にも、いつかは折衷派が堂々と現はれるであらう。さて例の學問源流に折衷派の消息を漏らして云へらく、寶曆の頃より種々に徂徠の學を疑ふ者多く、専ら學ぶ人少く、詩文も亦必漢以上盛唐を口にせず、又閨齊にも非ぞ、東涯にも非ず、陸王の派を習ふは尙稀なり、程朱の學を習ふかと思はるに、必ずしも信じて習ふにもあらず」と。此派の主唱は井上金峨天明四没であつて原雙桂、梁田蛻巖、祀平洲等が其後を紹いだ。此頃又細井德民、澁井孝徳、賴春水、中井積善、同積徳など東西相應じて經字文童に力め、共に大に舊時の面目を改めた。此後村瀬栲亭、巖垣龍溪など古註學の大家かいで、江戸には山本北山、龜田鵬齋名を一時に聳かし、太田錦城は稍後れて出た、北山殊に古文修辭の弊を矯め、錦城殊に經義發揮の功を積んだ。

斯くて諸藩の學館までも折衷主義を執る者多きに至り、續て又考證學が起つた。これは金峨の門人

吉田寛政一〇筆寛政一〇が安永天明の交へに始て唱へた一派で、支那の考證の學の此方へ移つたのである。幕末の學問は盡く此臭味を帶びたりと謂つてもよからう。

先是三宅石庵、中井甕庵、五井持軒等尙ほ程朱の學を奉じて終始變せず、中にも甕庵享保中大坂に懷德書院を開き私學は仁齊の堀川學校が嚆矢である、是より苟も經學文章を以て名を爲す者は皆私塾を持てゐた、此懷德書院の如きは殊に大きかつた。旗幟鮮かに物祖の學と相抗すること殆んど仇敵の如くであつた。寛政二年幕府の儒官天明八年儒官柴野栗山邦彦彦助文の禁令を發せしめた。

### 異學禁止の令文憲教類典卷四の八、憲法類集卷七、諸例彙纂卷七等に載つて居る

寛政二戊午五月二十四日松平越中守御渡

林大學頭に

朱學之儀に慶長以來

御代々御信用之御事ニ而、已に其方家。代々古學風維持の事被仰付置候儀ニ候得ば、無油斷正學相勵。門人共取立可申答ニ候。然る處。近頃世上種々新規の説を出し。異學流行。風俗を破候類有之。全く正學衰微之故に候哉。甚不相濟事ニ而候。其方門人共之内ニも。右跡學術純正ならざるもの折節は有之様に相聞。如何に候。此度聖道御取終嚴重ニ被仰付。柴野彦助、岡田清助儀も、右御用被仰付候事に候得ば、能々此旨申談じ、急度門人共異學相禁之、猶又不限自門、他門ニ申令、正學講究いたし、人才取立候様相心掛可申候事、

此禁令一たび發せらるゝや、忽ちにして天下囂々、詆謗百出、上命は默從するの外なかりし當時に於てすら、彼等古學の徒、若くは折衷學の輩は、口角沫を飛ばし筆硯聲を爲して、此禁令に抗辯した。就中伊東藍田、豊島豊洲、塚田大峰大川、戸崎淡園、市川鶴鳴、(以上江戸の五鬼)、山本北山、龜田鵬齋(所謂下町學者)、などか最も畏憚せられてゐた。京都にも亦皆川淇園此時既没、巖垣龍溪、林瀬栲亭、佐野山陰の四大家が嚴然たる古學の陣を張つてゐた。赤穂の赤松滄洲瑞亭和元は態々書を栗山に寄せ、大に禁令の不可なる所以を論せしも、栗山答へず、却て終始栗山に左袒せる備前の西山拙齊寛政一沒、

寛政一沒  
六四

が栗山に代つて滄洲に答辨した<sup>論學書</sup>其他前陳の塚田虎<sup>太峯</sup>天保一を始とし松川進修等も書を執政及諸教官に上つて其不可あるを述べ遂には大學頭林信敬までが幕府の所置を善しとせず、上書建言(?)する所ありしも、これまた聽かれず。越えて寛政五年信敬の卒するや、樂翁公定信は松下乘蒞の次子乗衡を勸めて、林家を繼がしめ、大學頭となし、同七年衡の請を容れて、聖道の組織を大に改め又栗山及び尾藤<sup>良助</sup>二洲<sup>孝筆</sup>の建議によつて、さきの異學排撃の法令を今一步進めて、朱子學を奉ぜざる者は敢て進仕することを得ざらしめた。尤もこの進仕の禁の本文は、憲教類典以下には遂に見當らざりしも、孰れの書何人の説にもかゝる令の出でたりと云ふことだけは見ゆるを以て必ず事實に相違はなからう。大槻博士秘藏の文書流風餘韻に左の書面がある。

昨日得御意候自家の説を申立候者共之義其節も申候通輕薄無禮無申方事ニ存候個様之輩は縱使小能御座候共斥ケて呼出し不申が直に教化の一事にも相成可申候且又孔子流さ稱し候輩好名を以自ら名を人を欺き申事別而可惡候古學と申名も同意に可有之候得共責而其名聞き能候凡て自己を張ん爲自稱を貴く致候類ハ皆斥け申度事ニ存候是等之事御申立被成候も只儒者御奉公之一事に可有候へば存付書認得御意候猶次刻拜面可申盡候委曲ハ相略し申候已上

九月六日

岡田 清助様

尾 藤 真 佐

按するに、岡田は寛政元年に召され、尾藤は同三年に召されたから、此文書は寛政三年以後のには相違なきも、何年の九月六日なりやは詳ならず。只これよりして、如何に七年の禁令が疾くより準備されつゝありしかを推測するに足る。

第二禁令出でて群議益匂々たりしも、威壓の結果は遂に全國に及んで、米澤岡山荻佐賀仙臺熊本の諸藩も皆朱子學者を擧ぐるに至り、所謂異學の徒は江戸を除く外次第に微熄して、互に門戸を強る

氣風も肅然として滅殺した。いでや其顛末を次章に於て話さう!!!

因云 各學派の主義如何は問答早學問及び學語に於て簡明にものせられてある

## 徳川幕府の地租に就きて（承前）

木 南 生

徳川幕府は前述の如く重に檢見定免の二法を用ひ其の中葉に至る迄は二法を并用し、或は時々換用したりしが、八代將軍吉宗の時に至り、代官をして農民に懇諭せしめ、漸を以て檢見取の法を廢し、悉く定免の法を行はしむとの事諸書に見へたり。されど寛政改革に於ける柴野栗山の上書を見るに、只今の御年貢御取立は、見取と申物に御坐候間、百姓其殊の外不出精に相成、五穀も不出來御坐候。とあり。且つ前述せし如く享保中新に有毛檢見の始りしを見れば、定免の法は單に布令に止りて、一般直轄地に波及せざりしものに似たり、元より當時の儒者は民を餓へしめざるを以て施政の大王眼となしし事なほ孔孟の如くなりしかば、定免は民をして豊稔豐なる能はず凶歲には死亡を免れしめざる苛法なりとて、一般の反抗を招きしは諸書に散見する如くなりしを以て、實際は容易に定免に變ずる能はずして推移せしに似たり。されば徳川時代の課税法は、重に檢見取なりしと云ふも過言にあらざるべし。

檢見取の弊害多きは始めに喝破これを喝破し、後には栗山これを唱導せり。

只今の御年貢取立は、……是を定免と申物にも被仰付候らは、百姓共も出精仕五穀も能出來可申